## 世界遺産物語 マヤ文明のチチェン・イッツァ

エッセイスト　近藤　節夫

周囲を圧するカスティーヨの威容

メキシコのユカタン半島を中心にメキシコ南部からグアテマラ、ホンジュラス方面にかけて、ほぼ900年に亘り繁栄した世界遺産・マヤ文明の遺跡が、小高い基壇上に数百か所も残されている。世界４大文明がすべて流れる大河の恵みを受けて栄えたのに比べて、マヤ文明は河川の水とは疎遠の高地に都市国家を構築し繁栄した。夏の豪雨が恵んだ沼や湖によりジャングルの中で古代都市は発展した。しかし、やがて豪雨が消えて旱魃が続くにつれマヤ文明は次第に没落して行った。今も遺跡の近くには雨ごいの名残がある。

手すりのない91段の階段をおっかなびっくり降る。※（中央部を降る２人のうち下は筆者）

マヤ文明の象徴である史跡「チチェン・イッツァ」は、半島の外れにある州都メリータの東約120㎞のジャングルの奥深くに佇んでいる。主にトルテカ文明を興したチチェン族とマヤ文明のイッツァ族による「チチェン・イッツァ」は、西暦350年ごろ勃興し、日本の平安期に当たる1000年ごろに最も勢力を拡大し、1250年ごろに滅亡した。日本人には、中々発音し難い地名であるが、地元の人に尋ねてみるとフランス語のリエゾン式に「チチェニッツァ」と発音すると分かってもらえるようだ。

そのいくつかの史跡の中でも、最も威厳がありバランスのとれたピラミッド「カスティーヨ」には、天文学の知恵や謎が秘められている。高さ24m、底辺は59m四方で各辺とも91段の階段が積み重ねられ、合せて364段となり、更にその上の最上段にククルカン神を祀る神殿がある。階段の数は合わせて１年の日数365段になる。マヤ文明では天文学が早くから発達し、すでに紀元前５世紀ごろから使用されて驚くほど現代歴に近いマヤ歴の１年は、現代歴とほぼ同じの「365.242128」日だった。ただ、閏年を採らなかったために少しずつ季節がずれて行った。農業もこのマヤ暦に従って行われた。近くにはカラコルと呼ばれる天体観測所もある。

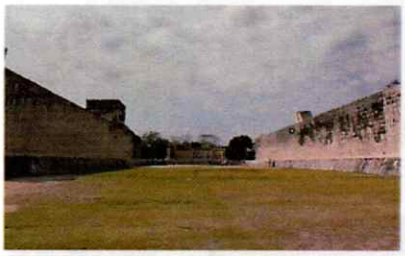
天文台（カラコル）

エジプトのピラミッドは王の墓所とされているが、マヤのピラミッドは墓所の他に、神を祀る場とされている史跡が多い。春分と秋分の日の１年に２日間は、夕暮れ時になると、カスティーヨの北側階段を時間とともに大蛇の影が下へ降り始め、日没直前には階段下の神の頭部像とつながり、まるで大蛇に変身したククルカン神が天から降臨したように思える。この現象により、当時の人々は春の種まきと雨季の終わりの時を知ったと言われている。

春分と秋分になると太陽の影が降りて左のように、右の蛇の頭部と繋がる。(wikipediaより)

この中央部の神殿上から絶景を満喫してから、手すりもロープもない階段を恐る恐る降ってみる。現代人にとっては、１千年の時を経て今に伝わる怖い度胸試しである。

近くには天体観測所の他に、この「チチェン・イッツァ」の源泉となった「セノーテ」と呼ばれる水深80mの透明な生贄の池がある。雨の神への供物であろうか、旱魃が来ると生贄として人や装飾品が投げ入れられたという。以前池の底から多くの人骨と黄金の円盤なども発見された。また、ここには驚くことにマヤ文明の500以上もある球戯場の中でも最大級のものがある。太陽神に豊作を祈るために、貴族の男たちが現在のサッカーに似たゲームでボールを壁の石輪に蹴り込む勝負を競い、敗者は残酷にも首をはねられ、その首が祭壇に曝された場所でもある。


球戯場　左右中央の上部に石の輪が見える。

今でこそ明るいイメージの人気観光地として脚光を浴びているが、マヤ文明都市の中で「チチェン・イッツァ」は最も血なまぐさい宗教都市だったと考えられている。それでもマヤの人々は神を信じて遺跡を暦になぞらえて建築したように、神への尊崇の気持ちを抱きながら生活を送ってきた歴史の息吹が、今日世界文化遺産として残されているのである。

水底から人骨が発見されたセノーテ(wikipediaより)